

発表者 山路 敦司（音楽研究科 博士課程 作曲・指揮領域）
テーマ 武満徹のポピュラー音楽に見られる作曲語法
ー映画音楽における旋律の分析による実証を中心にー

要旨

本論は作曲家武満徹の音楽に見られるポピュラー音楽性に焦点を当て、そのポピュラー・ソングおよび映画音楽作品を中心に、旋律の音高遷移による楽曲分析により音楽的特徴を抽出し、他の作曲家との比較を加えつつ武満のポピュラー音楽に見られる作曲語法として定義することを目的とした。問題意識として、（１）武満の作曲語法を論じる上でポピュラー音楽に対する視点が先行研究において少ない。

（２）武満の作曲家像が「言葉」によって演出され偶像化されている可能性がある。（３）作曲家による表現意図の有効性について鑑賞者の視点や評価が介在していない。以上を明らかにするため武満のポピュラー音楽作品の音高遷移の分析とそこに内在する音楽的特徴の抽出を行い、それをもとに映画音楽作品における旋律を中心に概観的な分析を行う。さらにポピュラー・ソングの聴取者における評価について実証実験を試みた。

第１章では、武満の生い立ちと音楽感覚の形成について概観し、作曲家を志すきっかけとなったリュシエンヌ・ボワイエのシャンソン《聞かせてよ、愛の言葉を》の聴取により受けた影響が、習作を含む最初期の現代音楽作品や付随音楽作品の中に具体的に見られることを確認した。とくに映画『狂った果実』における楽曲とその音楽演出について旋律の音高遷移を中心に楽曲分析を行い、両作品の共通性を通してその直接的な影響を具体的に指摘した。また本論を進める上でのポピュラー音楽の定義について検討した。

第２章では、武満のポピュラー・ソング 20 曲を対象に楽曲構成・リズム・音階・旋法・音高遷移・和声について楽曲分析を行い、それらに共通する音楽的特徴について 11 項目の定型パターンを抽出した。音高遷移については移動平均近似曲線を提示し、現代音楽作品におけるブルー・ノートの使用や「S-E-A」モチーフについてもポピュラー音楽的解釈により言及しながら、現代音楽作品に通底する作曲語法の可能性を検討する実例として具体的に指摘した。また武満を含む 6 人の作曲家によるポピュラー・ソングについて音高遷移における隣接する 2 音間の音程パターンによる出現率について比較を行った。

第３章では、武満の映画音楽より抜粋した 72 作品のメイン・テーマおよび劇中曲を中心に、前章で抽出した 11 項目の音楽的特徴を使用した楽曲分析を通して、そのポピュラー音楽性について概観を行った。またそれらの旋律の音高遷移について検討したところ、作曲時期や作風の違いに関わらずその音楽的特徴は一貫して旋律に内包されることを確認した。また 1950 年代の松竹映画における 2 人の監督（中村登、渋谷実）との協同において、同一監督による黛敏郎の映画音楽作品との比較を行った結果、両者の映画音楽に対する姿勢と作曲手法の違いを具体的に浮き彫りにした。

第４章では、武満のポピュラー・ソングの有効性についての実証実験を行った。実験 1 ではポピュラー・ソングを聴取した作曲経験者による旋律創作の実施を 11 項目の音楽的特徴について楽曲分析し、それぞれの実施結果に武満の音楽的特徴が捉えられ、隣接する 2 音間の音程パターンの出現率についてその有意性を確認した。実験 2 では一般聴取者にポピュラー・ソングの印象評価を行い、11 項目のうち主要な音楽的特徴が刺激として認知されることを確認した。実験 3 では一般聴取者に第 2 章の 6 人の作曲家によるポピュラー・ソングの識別実験を行い、武満の楽曲は「メロディーのリズム」と「メロディーの高さの動き」が注目されることを確認した。しかし隣接する 2 音間の音高遷移の相関係数について楽曲間の値は低く、作曲家の識別は武満が最も低いことにより、一般聴取者にとって武満のポピュラー・ソングによる音高遷移は作曲家の特性が識別しづらいことが明らかになった。しかし武満の音楽的特徴 11 項目による相関係数は武満が最も高く、統計的にこの定義の妥当性が支持された。